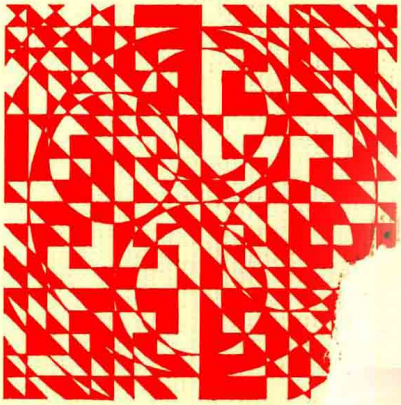
岩波講座

文学

12

現代世界の文学2



岩波書店

岩波講座 文学

12

現代世界の文学 2

岩波書店

〈執筆者紹介〉

内田義彦（うちだ よしひこ） 1913年生 経済学史・社会思想史『日本資本主義の思想像』『学問への散策』

大塚久雄（おおつか ひさお） 1907年生 経済史『社会科学の方法』『共同体の基礎理論』

武田泰淳（たけだ たいじゅん） 1912年生 1976年没 作家『司馬遷——史記の世界』『富士』

小田実（おだ まこと） 1932年生 作家『状況から』『ガ島』

大江健三郎（おおえ けんざぶろう） 1935年生 作家『言葉によって』『ピンチランナー調書』

渡辺広士（わたなべ ひろし） 1929年生 文芸評論家『カフカ——途方もない闘い』『野間宏論』

柴田翔（しばた しょう） 1935年生 作家『われら戦友たち』『犬は空を飛ぶか』(評論)

野間宏（のま ひろし） 1915年生 作家『真空地帯』『青年の環』

安部公房（あべ こうぼう） 1924年生 作家『砂の女』『箱男』

坂上弘（さかがみ ひろし） 1936年生 作家『ある秋の出来事』『藁のおとし穴』

丸山健二（まるやま けんじ） 1943年生 作家『火山の歌』『雨のドラゴン』

唐十郎（から じゅうろう） 1941年生 劇作・演出家『少女仮面』『煉夢術』

井上ひさし（いのうえ ひさし） 1934年生 作家『手鎖心中』『表裏源内蛙合戦』

吉増剛造（よします ごうぞう） 1939年生『黄金詩篇』(詩集)『頭脳の塔』(詩集)

真継伸彦（まつぎ のぶひこ） 1932年生 作家『鮫』『親鸞』

岩波講座『文学』12 現代世界の文学2(全12巻 第12回配本)

1976年12月10日 第1刷発行 ©
1980年9月16日 第2刷発行 ¥1900

発行者:緑川亨／発行所:〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5 株式会社岩波書店
電話03-265-4111 振替東京6-26240／印刷:精興社 製本:松岳社

落丁本・乱丁本はお取替いたします

岩波講座 文学 12

目次

Ⅳ 今日の危機的状況をどう受けとめるか(二)

1 科学へ――自然と人間……内田義彦……三
2 新しい社会と文化……大塚久雄……三六
3 社会主義的指導者S氏と仏教者B氏との対話……武田泰淳……五四
4 「詩心」と「小説心」……小田実……六七

Ⅴ 危機的状況における全体とその表現

1 全体とは何か、全体を見る眼はどのような眼であるのか……大江健三郎……九三
2 理論による全体化と直観による全体化……渡辺広士……一一九
3 現代日本の状況全体を小説はいかにしてとらえうるか……柴田翔……一四二
4 文学における全体性……野間宏……一八〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

VI 全体を表現する方法を求めて

1 言葉によって言葉に逆らう……安部公房……二四九
2 日常性とそれをこえるもの——或る亡友への手紙……坂上弘……二五七
3 地域性と全体……丸山健二……二七六
4 演劇の復権——〈見えざるコーラスの側から〉……唐十郎……二九一
5 風刺と笑いによって……井上ひさし……三〇三
6 詩の復権——詩の発生する場所をめぐって……吉増剛造……三一六
7 歴史にどう挑むか……真継伸彦……三三二

Ⅳ　今日の危機的状況をどう受けとめるか(二)

1　科学へ
——自然と人間

内田義彦

一

私に与えられた課題は、総目次によれば「現代世界の文学」の大項目に属する「今日の危機的状況をどう受けとめるか」という項目のそのまた小項目の1であって、もと「科学へ——新しい自然の見方」という表題が付せられていた。「新しい自然の見方」について自然科学者がさまざまな面で提出している問題に対して関心がなくはない。多少読みあさってもみ、耳学問も、注文をうけてからは二、三読み深めの努力をはらってもみた。しかし、正面切って文章化するには何としても考えが熟さない。熟さぬものを熟さぬまま書くのも一つの勉強ではあるが、読ませられる読者はたまったものでなかろう。それで副題をあらため、私なりに長年考えてきたことを新たに講座のコンストラクションの中で再考し、読者に何らか役立たせてもらうことにした。御諒解を得たい。

それにしても、私なりに歩を進めるにあたっても、一応の土地勘は必要なわけで、その土地勘を養う一助にもと思って既刊の講座『文学』(さしあたって第一、第二巻)に目を通してみた。それぞれに面白く私の世界を広めてくれ、地平を見定めるのに役立つところ多かった。中でも杉浦明平の「歴史文学における想像力の問題」は社会科学者たる私

の想像力を喚起し、科学と文学へ、そして自然と人間へと私のテーマをふくらませてゆくきっかけを与えてくれた。

この論文は歴史文学の実作者杉浦の書いたものであるだけに一見明解であるが如くしてふくらみが多く、再読三読するに従って表の論理と一見矛盾する裏の世界の論理が私を包み込んできて簡単に要旨の全体を伝えることを許さない。またそれをやっていては「歴史小説と歴史学」というテーマへの一接近に終始することになって、私に与えられたテーマとずれてしまう。それで杉浦には気の毒だが、一つの発言だけを切りはなして「科学へ」という小論への話のきっかけとしての役割を果させてもらうことにした。杉浦はいう、

歴史文学は出来あいの歴史または歴史研究からだけでなく、歴史家と同じように、上にのべたような史料そのものから直接に素材を掘り出さねばならぬことがしばしばおこるが、その資料の処理にあたっては、歴史学と同じような厳密さが求められるはずである。総じて文学には空想や想像の自由な飛翔がゆるされているけれど、歴史文学ともなれば、歴史時代の完全な再現は不可能であるとしても、歴史学の到達したところを尊重し、残存する史料を慎重に取扱うよう心掛けるべきであろう。

……

綿密正確に考証された歴史的事実とうらはらな内容をもつ作品は今日的意味においては歴史文学の名に値しないのではなかろうか。歴史的文学が歴史文学の名に値しなかったら、それは文学の名にも値しないということではあるまいか。

最後の引用において「今日的意味においては」という言葉を杉浦が使い私がそれに傍点を打ったのは、杉浦が『平家物語』や『太平記』は、事実に拠るべき歴史書ではなくて、ありうべきシーンや情況を想像力を駆使してつくることを許される文学書なのである」といい、さらに、そういうことは「歴史と文学が分化しない近代以前にはあたりま

えのことだった」といって、ディテールにおける事実の矛盾を指摘して揚足をとった「儒学者」に対して「文学と歴史を混同するもの」と断罪しているからである。すると物語は、歴史的には文学であり、そういうものとして受取るべきであるが、今日的意味では歴史文学では、従ってまたそもそも文学ではなくなるというべきであろう。少なくとも今日の時点においてそういう物語的歴史文学をつくったとするならば、それはもはや歴史文学でも文学でもない。

以上の立言に私は完全に同意する。歴史的事実と矛盾した小説は通俗文学では許されても歴史文学とはいいえない。このことは真面目な歴史文学の生成に微妙に入りまじって歴史物が氾濫し、歴史ブームをひきおこしている現在においては特に重要なことと思われるのである。しかし歴史的事実とは何か。

歴史的事実は、歴史的資料の中に埋もれており、かつまた歴史的資料の中に事実を見出すべき史眼の曇りにおおわれている。氾濫する或いは欠如する史料の中に透徹する史眼をもって事実を発掘する作業が歴史学であり、その諸事実の間の関係を法則化する学問が社会科学であるが、重要と思われる事実を発掘しそれを法則化する作業は、果して文学の以前に、文学と完全に独立して行なわれうべきものであろうか。歴史文学が歴史的事実をもとにして書かれねばならぬことはいうをまたぬこととして、その事実は歴史学の、あるいは当該の時代についての社会科学的分析の結論を前提にして始めて歴史文学が成立するということを意味しまい。それだからこそ、すぐれた歴史文学は歴史研究書とともに(あるいはむしろより多く)歴史上の根本資料の発掘と解読の上に成り立っているのである。その根本資料の発掘作業と史学的に厳密な解読には、全人間的な、従って広義の文学的な想像力を必要とする。歴史的な解明を必要とする個々の事実を、まさに全体の構成に重要な個々の事実たらしめる史観そのものもまた科学と文学の接点にある。歴史学と完全に矛盾する歴史小説が歴史小説といいえないことはいうまでもなく事実であるが、それとともに、逆説的な表現をあえて用うるとするならば、深い意味に理解された歴史文学に完全に矛盾する歴史学は歴史学として

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

失格であり、歴史学の要求する作業にしたがいつつ改訂を要する、という立言も成り立つであろう(人間不在の歴史学)。むろんそのことは歴史学者が同時に専門の文学者でもあることを意味しない。しかし生き生きとした歴史書に接しその史料解釈の現場を構文それ自体のなかで追体験するとき、われわれはその歴史学者の史眼、史料解読の作業のなかに、人間の全体把握において文学のみの養いうる想像力が駆使されていることを容易に体得しうるであろう。このばあい歴史学者の文学精神は歴史叙述そのものに現われるのであって、もし彼が文学書を草するとすれば、おそらくは彼の文学精神はまことに貧弱なあらわれしか提しえないはずだ。それはちょうどファラデーあるいはまたダーウィンがもし小説を書いたならば、『ロウソクの科学』や『ビーグル号航海記』が持つ文学性を持ちえないだろうのと等しい。かつまたその歴史書が個々の人間を表立って叙述しようが叙述の表面から人間を完全に消して下部構造的叙述に徹しようが、それは、その文学書が人間不在であるかどうか、全人間的想像力の所産であり読者の全人間的な想像力を喚起するかどうか、と完全に無関係である。人間が登場せぬ人間的な経済史もありうるし、「人間」は出るが人間不在の歴史学だってある。

導入部が大へん伸びたが、私の立言の趣旨は歴史文学と歴史学との関係をそのものとして扱うことではない。以上の考察にあたって私の脳裏に据えられていたのは私のテーマ——というよりもたまたま私ごときものにそのテーマが与えられるに至った本講座の一つの主要テーマ——であるところのもの、すなわち、人間と自然との関係の学問的考察が文学とどうかかわりあうかである。

この点についての私の結論を、歴史小説に即してさきほど述べたと同様に極端な形で述べておけば、今日の危機的状況についての自然科学的・社会科学的な結論がまずあって、その結論の受容のうえに、それを前提にして今日の自然と人間との関係を取り扱う文学が成立するのではあるまい、その逆も同等の資格をもって成立する、ということだ。

いったい何が危機であるかを判断する基準は諸科学そのものからはでてこない。いや危機という発想自体が人間的なものであって、別の観点からすれば地球が無生物のかたまりになること自体、自然史的過程の一つのありうべき方向にすぎない。危機を危機として受けとめ、それを解決すべき課題として諸科学におくりこむ操作自体、意味付与という人間的営為を前提として成り立つ。むろんそれは、自然と人間との現況の科学的に正確な把握への努力を完全に無視して文学が成立するという意味ではないことはあらためて繰返すまでもあるまい。という大上段な立言を正面から取り上げる愚を避けて、歴史小説ならぬ歴史ものとともにいま氾濫しているSFなるものを例にとってみよう。

二

SFは、一つには過去ではなくて未来ないしは未来に関連して現在を取扱う。一つには――この方が少なくとも私のテーマにとっては重要と思われるが――人間と自然というテーマを直接に据える。この二つの点で、歴史小説と異っている。但しそれが大衆の卑俗な興味ないし好奇心に訴え現代に関心を持たせる如くして現代を見失わせる点では同じ作用をもっており、この二つが同時にブーム化するのには同じ根源――現在につながりをもつが如き形での現代からの逃避――をもっているかと思われるが、今はそれを問わない。私が今問題にしているのは自然科学の発展したある局面をもっぱら興味的に取扱う通俗的なSFではない。歴史ものと区別された本格的な歴史小説が存在しうるしなければならないのと少なくとも同様に、本格的なSF(科学小説と呼ぶべきであろうが、あえて刺戟的に一般の称呼を使っておく)が成立可能であるし成立しなければならないと思う。より端的に私の考えを述べれば、本講座の刊行趣旨その他を読んでまず脳裏に浮んだのは本格的なSFの生誕をこそこの講座はよびかけているなということであった。むろん、小説がすべてSFの一面をもたねばならぬという意味ではない。文学の中に、一つのジャンルとし

て本格的なＳＦ――その成立が、直接に人間と自然とのかかわりを取扱うＳＦをこえて、文学一般に現代の文学としての筋を通すことを可能ならしめるようなそれ――が含まれねばならぬであろうということである。その本格的なＳＦは科学に負う一面を持つと同時に、小説として科学に一定の方向づけを与え、科学的思惟そのものの中に入って科学を支える一つの支柱になる、そういうものでなければならぬと私は思う。

いま考証の準備はないが、物語が小説と未分化の時代があったのと同じくＳＦが科学と未分化の時代もあったのではないか。『種の起源』の母胎たる『ビーグル号航海記』は科学書であると同時に文学の書でもあった。そうしたＳＦが一般に小説の根源であったということは、おそらく歴史的事実とちがうであろうとは想像できる。がしかし、根源的な小説でいま文学として新たにみるべきものの多くとはいいえないにしても少なくとも若干のものが、広い意味に解釈したまじめなＳＦでもあったということはあながち詭弁でもなかろう。その一例がメルヴィルの『白鯨』である。

『白鯨』を単に人間と鯨との闘争とする見方がいかにメルヴィルを卑小化するか、その例は映画に典型をみる。むしろあの小説のテーマは人間と自然であり、潮流に乗る鯨、そのまた潮流を知り操作する人間の物語なのであって、冒険の奥に含まれた科学性はほとんどウィンパーの『アルプス登攀記』を思い出させるであろう。

この小説の魅力は、開巻第一頁からわれわれをとらえるところの「大洋のうねり」のように荒々しく雄渾な文体――といっても私はこの小説を翻訳で読んだにすぎず、原文には接していないからそれについて確信的なことをいう資格はないけれども、訳者阿部知二氏の謙遜にもかかわらず訳文を通してうかがい知ることが出来る――とともに、科学者特有の、ことさらに感情を殺した筆致を以てする学問的推論や文献考証の章句があたかも交響曲の第二テーマのように織りなされ、第一テーマの荒々しい文体と相呼応して作品の全体に安定したリズム――それこそ「大洋のうねり」という言葉を以て表現したい――を与えている点にあると思う。

エイハブ船長が乗組に対して、その目的についての狂気じみた承認を求めた次の夜の暴風の後、彼に従いてだれかがその船室に入って行ったとすれば、彼が船尾梁にしつらえた戸棚に歩み寄って、巻いて皺だらけになり黄色がかった海図を取り出して、針止めした卓のうえにひろげるのを見たことだろう。それからその前に腰をおろしその眼に映るさまざまの線と色とをはげしく凝視し、それからその空白の場所にゆっくりと、しかししっかと握った鉛筆でさまざまの線をつけてゆくのも見たことだろう。ときどき、かたわらの古航海日誌に眼をやり、さまざまの船のさまざまの航海で、抹香鯨が捕えられたり認められたりした時期と海域とをしらべた。

……

しかし、ひとりの船室にこもるエイハブが海図を熟視するというのはこの夜にかぎったわけではなかった。ほとんど毎晩、海図は引き出され、鉛筆のしるしが消されたり、また新しいしるしがつけられたりした。四つの大洋の海図を前にして、ひたすらエイハブは、おのれの魂の偏執をみごとに完遂しようとして、あやめもわかぬ汐路の流れをまさぐっていたのである。

さて、巨鯨の族の習俗を十分に知らぬ人々にとっては、この茫漠とした衛星の大洋のうえに、ただ一個の生物を探しもとめようなどというのは、まことにばか気きった無駄ごとだとしか見えないだろう。だがエイハブはそうは思わない。彼はあらゆる潮流海流の道を知り、それゆえあの抹香鯨の餌の流れもきわめ尽し、そいつをどの緯度ではどの時節に追うのが確かであるかについて、思いをこらし、ほとんど正確というべき点にまで、おのれの獲物をどこそこで襲うべきかというその日限までを、推理して出すこともできると考えていたのである。

抹香がある特定の水域にあらわれる週期についての事実は、じつに確かなものであるから、多くの捕鯨者の信じているところによれば、もし全世界においてそれを観測し研究し、全捕鯨船隊の記録を校合することさえでき

たらば、抹香鯨の周遊は正確に鯡群の動きや燕の往来と合致するということを知りうる。この示唆にもとづいて、抹香鯨の移動の精密な海図を造ろうとする試みも多々あった。

……

その上、抹香鯨の族は、ある餌場から他へと遊弋するとき、何かしら正確な本能――いや、神から受けた秘密の知恵ともいうべきものにみちびかれて――「脈」といわれるところのものを泳ぐ。つまり、どんな船がどんな海図によっても、その驚くべき正確さの十分の一も真似できぬほどに、ある海原の道を少しも外れることなく泳ぐのである。これらの場合、ある一つの鯨の取る方向は測量師の平行線のように真直であり、その進航の線はみずからの決定的な直線にかぎられているのではあるが、しかしそのような時、彼が泳ぐといわれる「脈」の自由さは、大体は二三マイル(脈が膨れたり縮んだりするにしたがって大小ができるが)の幅を持っている。しかもそれは、この魔法の汐路の縁辺をゆく捕鯨船の檣頭から、肉眼で見はるかし得る広さを越えることはない。結局のところ、ある特別の季節に、その路のその幅の中でならば、巡遊する鯨群に遭遇することは期して待つべきものだ、ということである。(岩波文庫版)

科学的叙述についていえば、メルヴィルのこの小説にはウィンパーの『アルプス登攀記』にあってその興味の焦点を形づくるところの「発想の転換」のドラマティックな局面はない。そのかわり、ウィンパーなる孤立的個人と自然との交渉に終始する『登攀記』とはちがって、荒くれた男の集団とこれまた荒くれた自然との関係が正面から描かれ、この小説をまさに「大洋のうねり」の如きものとしている。

いうまでもないことながら、メルヴィルが船員として自ら体験した一八四〇―五〇年の時点での捕鯨業は、気象や潮流の個別的な動きという、今日においてさえ未確定事項の多い自然の秘密にいどんだ先端産業の少なくとも典型の

一つであり、(先端産業といっても国家の事業としての先端産業ではなく、民間の人の冒険精神とその能力のみを頼りとした民間産業であることをつけ加えておく。)メルヴィル自身その捕鯨船の一船員として冒険と科学的精神がいかに媒介されているか、要するに科学的思考とは何かをその局限状態において体験したはずである。登場人物たる様々の水夫はエイハブとともにこういう意味ですべてメルヴィルの化身であるといってよい。

メルヴィルは普通の商船の伝統的規律が捕鯨船においては無視され、それにかわって新たな規律が生じていることをこの小説でわれわれに明示的に告げているが、その古い規律の消滅も新たな規律の成立も、ともに、限界状況における人間と自然との格闘の中に生じた法則的なものとして彼が驚きの眼を見はりつつ発見したものであることはまちがいない。そこにおいて——不可知な環境的自然との格闘の中において——生まれつつあるもの(自然)としてメルヴィルが描いた新しい人間関係の芽は、読者たるわれわれの想像力を未来の社会にむかって働かせる。

『白鯨』は捕鯨がようやくこれから始まろうとするときの小説である。しかしメルヴィルはいまこれを読む読者に鯨を絶滅する方向へとイマジネイションを刺戟しないであろう。むしろあの灰色の鯨の死滅に人類の滅亡の図を重ね合せつつそれに対して敢然と立ちむかう人間へと想像力を刺戟する。科学のつくり出した悲惨を打ち破るのはステント(『進歩の終焉』)のポリネシア的自然への逃避ではない。『白鯨』の全巻を貫くあの雄渾なタッチ、文体に表現されるような荒々しい、しかし、科学で武装した精神を以てする自然破壊への挑戦であろう、と思うのである。

こうした、メルヴィルの小説の科学性に対してみると、現在われわれの手にするSFの多くが、われわれの想像力に働きかけるその力と幅がいかに卑小であるか。それはせいぜい「先端的」科学の結論をわれわれの日常的な興味の「脈」に結びつく限りにおいて利用するにすぎず、科学することへ、そしてむろん新しい社会への構想へとわれわれの想像力を飛躍させることはない。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com